

ひじおり 夏の映画祭り

2021 8/19 [木]
午後 6:30~9:00

村井六助旅館 駐車場(川沿い護岸通り)
※雨天の場合は、つたや肘折ホテルで開催

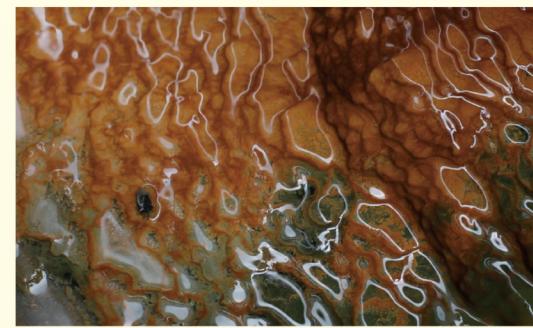
参加無料

特別上映

「水景」

(2020/5分46秒/撮影・編集:小田香)

新進気鋭の映像作家が東根での個展のため、2020年10月に肘折温泉で創作滞在した際につくった映像作品。温泉街のあちこちを流れる水と湯の情景、多彩な表情を見せる湯気、動く水が奏ぐる豊かで多彩な音の調べ。生命の源泉であり、湯の里の真髄である、動き止むことを知らない天然水へのオマージュ。

PART
1

人形アニメーション名作の競演 6:30~

「おこんじょうるり」

(1982/26分/監督:岡本忠成)

日本の人形アニメーションの草分け岡本忠成(1932-1990)が、淨瑠璃で病を治すキツネと老婆の交流を描く。腰を痛めた盲目のイタコの婆さまの家に、腹を減らしたキツネが迷い込んでくる。哀れに思った婆さまが家中の食べ物を与えようとすると、キツネはその恩返しに淨瑠璃を歌い始める…。



「劇場版 ごん」

(2019/28分/監督:八代健志)

いたずらばかりしている小ギツネのごん。ある日、兵十が川で獲ったウナギを、ごんはいたずら心で逃がしてしまう。それは病氣の母に食べさせるための大変なウナギだった…。児童文学「ごんぎつね」を原作に、人形と美術の繊細な造形と、鮮やかな季節と風土の描写をとおして、自然と人間の無常を見つめる。

PART
2

大蔵村・肘折が舞台の記録映画 7:30~

「気配」 FACES やまがたシリーズ最新作

(2021/mp4/10分/作:川上アチカ)

豪雪地帯・肘折での生活は、圧倒的な自然との共存を強いられる。そこには雪を降らせる巨大なエネルギー、温泉という癒しをもたらした地蔵、その地蔵への信仰とそれを守り続けた先祖の靈がある。月山が死後の体験をする靈山であるからだろうか、それとも白銀の世界にしばらく身を置いたことで私の野生が目覚めたからか、目には見えないそれらの存在の気配を感じ、それに守られた一冬の時間を映像に残した。(川上アチカ)



「肘折物語」

(1992/16mm/18分(未完成)/監督:小川紳介、撮影:加藤孝信、編集:小川紳介、田村正毅、土本典昭、出演:森繁哉)

戦後の日本ドキュメンタリーを代表する監督が最後に取り組もうとしていたのは大蔵村のフィリピン花嫁だった。監督の死により中断し完成を見なかつたが、若いスタッフの腕試しを兼ねて肘折で撮影をしたテスト・フィルムの、盟友の手による粗編集が残された。この年最後の雪に春の到来を思い、村の拡声器からはキャンディーズが流れる。



「大蔵村 踊る男」

(1999/16mm/35分/企画:大宮浩一、監督:鈴木敏明、出演:森繁哉)

大蔵村の森繁哉さんは舞踏家。森の奥地、四ヶ村の棚田、雪深い道、川の流れの中で、山の神や民話の世界と一体となって踊る。一方ではスキーで遊ぶ子どもたち、晴れ着の成人式、消防団や女性たちの集まり、朝市や雪灯籠など、生活風景のスナップが散りばめられ、当時の大蔵村の不思議なポートレートとなっている。



「雪の肘折温泉」

(1976/16mm/9分/企画:大蔵村肘折温泉/監督:波多野勝彦/所蔵:大蔵村教育委員会)

肘折温泉の魅力を、春夏秋冬毎に紹介する予定で作られた観光PR映像で、このフィルムの他は存在するのかどうかも不明。時は昭和50年頃、村営湯の台スキー場がオープンし、活気とエネルギーに満ちた時代ながら、同時に古き良き肘折温泉の冬風情を、地蔵倉や小松淵の雪景色、温泉街を行き交う人々の表情の中に見ることが出来る。



「肘折温泉と宮さま」

(制作年不明/16mm/11分/サイレント/所蔵:大蔵村教育委員会)

昭和33年と35年に肘折温泉に御来村になった高松宮殿下。このフィルムは昭和33年の初来村の際の記録映像。茅葺屋根の洒落な木造旅館が立ち並ぶ勝景は、まさに山間のユートピア。無声ではあるが、フルカラー・フィルムの色彩の鮮やかな自然の色は、風の音や水のせせらぎ、人々の喧騒まで聞こえてくるようだ。



山形ドキュメンタリー道場とは

日本とアジアのドキュメンタリー作家が製作途中の自作をたずさえて、自然豊かな山形県の温泉地に長期滞在するアーティスト・イン・レジデンス事業です。制作者は、他の参加者や地域社会と交流をしながら、作品づくりを見つめなおす集中した時間と場所を得られます。山形市では1989年より山形国際ドキュメンタリー映画祭が開催され、国を越えて映画と観客が出会い祝祭の場として「ヤマガタ」はドキュメンタリーの制作者やファンの間で愛されています。

2022年も
肘折温泉で
開催!